



箏曲家・ジャポニスム振興会副会長
大谷祥子さん

「日本のこころと文化」を発信

邦楽は、日本人の精神性が息づく
終わりはすーっと、終末感に相通する
未来は厳しい、とことんやるのが流儀

できている。

国際交流を 「日本文化への誇り持って

「日本人は、もっと外交に文化
を使って欲しい。外交で一番必要
なのは、自分たちの文化に誇り
を持てる心です。ジャポニスム振
興会は日本文化の素晴らしさに
気づいてもらうために、さまざま
な催しを開き、一方で、伝統文
化を学び、習得し、自ら伝えら
れる人材を育てる事業に取り組
んでいるのです」

中でも、大谷さんが推進してい
るのが、邦楽の振興である。各
地で開く演奏会では、自ら舞台
に立つ。伝統芸能には、日本人
が連綿と受け継いできた精神性
や感性が凝縮されているという。
西洋音楽との違いで言えば、
始まりと終わり方に大きな差が
あるのだそうだ。「洋楽は指揮



響流庭(こうるてい)と名付けられた
苑内東側の庭は、季節の花々で彩られている



嘉枝堂(かえどう)の奥には比叡山を望む

京都駅から車で20分ほど、東
山三十六峰に連なる六条山に分
け入った。四季折々、花山法皇
が愛でたという山吹と山藤、桜
も梅も咲き誇る花山の地である。
山頂付近、緑に溶け込むように
建つ威風の伽藍、東山浄苑東本
願寺に大谷祥子さんを訪ねた。
大谷さんは、箏曲家であり、
ジャポニスム振興会副会長でもあ
る。金沢から来た我々を加賀友
禅の和装で出迎えてくれた大谷
さん。ほの暗い伽藍の中でも眩し
く見える。華があるとはこういう
人のことを言うのだろうか、など
と思いつつ話を聞いた。

「日本のこころと文化」と向きあ
い、広めようというジャポニスム
振興会の活動も九年目に入った。
これまでに国内外で、講演会や
シンポジウム、コンサートなどさま
ざまな文化振興事業に取り組ん



大谷さんが爪弾く凛とした箏の音が、黒書院に響き渡る

● 特別企画

わが道

者によって始まり、エンディングも華やかに終わる。邦楽は、小林秀雄のいうところの『よろしく始まりよろしく終わる』。西洋はラストに向けてテーマが何度もリフレインされて、終末がにぎやかだが、邦楽の終わりは、急速にゆっくりになり、すーっと終わりを迎えるのです。これこそ、日本人の美学、終末感に相通ずると大谷さんは見ている。「西洋の音楽には、ハーモニーがある。邦楽には休符の間が入りゆらぎを生む」。

門外漢には難し過ぎる概念だが、箏でも鼓でも三味線でも、曲が始まる前に一瞬の構え、間があるように思う。音を出す前に

演奏は始まっている。そうした無の時空の存在こそが、回帰性を持たない一期一会の音につながる、という理解でいいのだろうか。とりわけ大谷さんにとって箏は特別である。「お箏は歌。自然を、風をも表現する。能楽から伝えられてきたものもあるが、遊女の話もある。切ない嘆きの内容も多い」。

大谷さんが箏を始めたのは四歳のとき。箏曲の大師範だった祖母から手ほどきを受けた。幼い身で、一日箏の前に座った。身の誰もがぐるぐる習い事の関門のようなもので、ごく自然に邦楽と向き合い、自分だけがその世界に

残った。小学六年で箏曲の全国コンクールで二位となり、卒業文集には「箏曲家になって世界を回りたい」と書いている。既に、箏の演奏家は自分の天職という意志を抱いていたようである。



箏の存在は「息をするのと同じ感覚」

「息をするのと同じ感覚」というほどに、箏は大谷さんと一体となっていく。「どんなに苦しくともお箏を辞めようと思ったことはなかった」。むしろつらいときこそ箏を弾いた。「お箏を弾いたら、嫌なことは忘れられた」のだという。

迷わず東京藝術大学に進み、全国コンクールで受賞を重ねていく。CDも出せば、リサイタルも開く。平成十三年には世界に羽ばたく芸術家を養成する文化庁

インターンシップ研修生にも選ばれ、以後、気鋭のアーティストとして、活動を世界に広げていった。

そんな大谷さんに大きな転機が訪れたのが、お寺に嫁ぐことになったときだ。今や、大谷さんには本願寺裏方というもう一つの顔がある。お寺に入った当初は、戸惑うことばかり。ただ一つ、申し出たのは箏の演奏を続けたいということだった。一人、黒書院の奥で箏を爪弾く日々もあった。が、やがて本願寺文化興隆財団が開始するジャポニスム振興会による仏教文化振興および日本の文化芸術振興事業の推進役として、大谷さんの偉才がはまっていくなされる。

一方で、箏を続ける代わりというわけでもないが、仏教を学ぶよう求められていた。大谷暢順法主に師事するとともに、京都大学文学部仏教科に学ぶ。平成二十二年には得度し、本願寺裏方としては前例のない法主存命中の僧侶となった。

仏教の知識は、座学で積みあ

わが道

がつていくが、どこか腑に落ちない、何か胸につかえるものがあった。そんな折、福井県の吉崎御坊蓮如上人記念館に赴いたとき、こつんと得心の行く出会いがあった。門徒の一人が、「今年が良いお米がたくさんとれましたよ」と持ってきてくれた。見ると、真っ黒に荒れた手が痛々しく、思わず「大変だったでしょう。毎日草引きして、手塩にかけて育てられたんですね」とねぎらった。すると、「いえいえ、お天道様と蓮如さんのおかげなんですよ」とほほ笑んだ。その当たり前のような物言いに、すーっと感得するところがあり、涙が止まらなかつた。

北陸には「おかげさま」の言葉の文化がある

「北陸には、おかげさま」という言葉の文化があります。自分なりに最大の努力はするけれど、結果は皆さんの、蓮如さんのおかげという言葉が自然と出る。北陸の人たちには感謝の思いというのが生活の中に染みついていて、日本の文化とところを取り戻

そうという取り組みは、感謝という日本人らしい精神風土が残る土地柄にこそ相応しいとの思いから、大谷さんの活動は、以後、吉崎から金沢、富山へと広がっていく。あたかも、蓮如の布教の道をとどめるかのようでもあった。

金沢には、箏や三絃、笛などの担い手が数多くいる。ジャポニスム振興会の金沢公演として、平成二十六年に地元奏者と共演した「金沢絃奏物語 泉鏡花の夕べ」は圧巻だった。「金沢には、東京などにはない歩きたい路地が残っている」と大谷さんが金沢に魅せられたのは、震災にも大災害にも遭わず、有形無形の日本らしさが今も残っているまち、と感じたからではないだろうか。

その後も、藤間信乃輔さんらによる琳派四百年記念 in 金沢公演や藤舎眞衣、望月太満衛、加賀山紋さんらとのコンサートを重ねていく。今年三月には、金沢港クルーズターミナルで、二回目となる全国じよんから三味線競技会石川大会が開かれた。振興

「じよんから」の縁で発足した三味線競技会

石川県内には多くの地区に「じよんから」盆歌が伝わっている。諸説あるが、じよんからの語源は、豊作や安らかな世を願う「自安和楽」、念仏で平らかな心を得る「常和楽」、そして上様と蓮如上人から教えられた唄との由来が残る。無論、じよんからといえは津軽民謡だが、そこには北前船伝播説がある。吉崎御坊蓮如上人記念館館長となった

大谷さんは、この地との縁を感じずにはいられた。全国のじよんから三味線演奏家が腕を競い合う大会が誕生する素地が、この地にはあったのだと、感謝の思いを抱いている。

ジャポニスム振興会の活動を進めているうちに、大谷さんの日本文化への思いも深化していった。箏の演奏のみならず、今では、日本文化について話をする機会も増えた。たいがい、世阿弥と源氏物語がテーマである。「勝者が歴史を作り、敗者は文学を作る」という言葉があるでしょう。

日本文化継承のスターを作りた

大谷さん自身は、邦楽の未来について、実は「厳しい」と思っている。だからこそ「本物」の日本文化の継承者を作り出したい。一人スターが生まれれば、世間の見る目もがらりと変わる。とにかく伝統芸能の技と精神を途絶えさせてはならないと考えている。「この先、いつどうなるかわからない。中途半端にやっている暇はないので、とことんやる」のだという。柔らかな物腰の中に、意外にも直往邁進の気概を秘めた人だった。



六条山には藤や山吹など季節を彩る草木が豊かに生い茂る



名言だと思つています。世阿弥の真骨頂は「敗者復活」だという。現世で報われない敗者を能の中で救い、往生させる。能楽をはじめ日本

の伝統芸能は、現世での苦しみ、叫び、憎しみを芸術作品として浄化させ、怒りを和らげ、憎しみを溶かすもの。それが歌であり、セリフであり、悲鳴にも似た和楽器の乱舞なのだという。源氏物語はどうか。「紫式部は一条天皇がお喜びになる話を書けばよかつたはず。しかし登場人物は皆、人に言えないトラウマを持

ち、光の君は手に入らない継母の面影を女性に探し、出世もうまくいかない。恋におちた女性の七割が出家し、誰も仕合せにならない。一番愛された紫の上すら愛する光の君の子供をもてない」。世界に誇る日本の古典から何を汲み取つたらいいのだろうか。それは、このころの大切さに目を向けよということなのかもしれない。人は現世の執着を離れ、心の安寧を得ることで初めて幸せと向き合えるのではないかと。やはり、日本文化とは、こうした名状しがたい日本人の独特の感性を背景として成り立っているのだと、その深淵さにはんのちよつと触れさせてもらった気分だった。

今、大谷さんは、次代を担う子供たちに「日本人として誇りを持てる文化を小さいときから身につけ、世界にはばたいて欲しい」と強く願っている。伝統芸能の何か一つでも学び、外国人の前で堂々と披露する。それだけで、一人一人が日本を発信できる外交官になれる。そのために「伝統文化



Profile

大谷祥子(おおたにしょうこ)
箏曲家
東京藝術大学音楽学部邦楽科卒。賢順記念全国コンクール1位。平成25年度文化庁芸術祭新人賞受賞。古典邦楽のみならずさまざまなジャンルのアーティストと共演、国内外で演奏活動を展開。本願寺文化興隆財団参議、吉崎御坊蓮如上人記念館館長、鴻巣市観光大使、京都市「DO YOU KYOTO?」大使、第40回京都府文化賞功労賞受賞。

